

# 勝海舟と井上円了

勝海舟と福沢諭吉、新島襄との関係と対比させて

## 三浦節夫 mitsu noetsuo

### 一 海舟の学校教育への関心

明治維新以後、勝海舟は二年三月一六日に自邸の門へ「売国奸臣」の落書きがなされるなど、幕藩体制解体の先導者と見なされた。その一方で設立まもない新政府は政治的バランスの必要性から、海舟に対して政権への参加を求めた。この矛盾する状況のなかで、旧徳川幕府の関係者の救済にあたり、同時に明治政府を支えたのは海舟であった。

明治への改元以後に、海舟が着任した官職は明治二年の外務大丞（七月一八日任命・八月一三日免職）と兵部大丞（一月二三日任命・即日辞意を申し出るも不許可、一月二八日に徳川家臣たることを辞退する辞表を藩知事に出すが却下され、大丞も三年六月二日免職）、五年五月一〇日に海軍大輔、六年一〇月二五日に参議兼海軍卿、八年四月二五日に元老院議員（一月二八日辞表許可）、二〇年五月七日に伯爵親授、二十一年四月三〇日には枢密顧問官に親任されている。この間に海舟はたびたび辞意を伝えたが、政府に受け容れられないことが多かった。そして三一年三月二日には、徳川慶喜が三一年振りに皇居に参内し天皇・皇后に拝謁して、皇室と前將軍との和解を実現させている。

こうした苦渋の選択のなかで、海舟は生涯にわたり政治家として活動し続けたのであるが、海舟が学校教育に關してどのような関心をもっていたのか、そのことはあまり知られていない。海舟の研究者である勝部真長はその伝記『勝海舟』において、同業者の反対にあつて実現しなかつたが、年若く貧しい盲人のための自由で画期的な盲人学校設立を計画した曾祖父の米山檢校の情熱に似て、海舟も学校に強い関心をもつていたとして、つぎのように述べている〔一〕。

「若い頃、（海舟が）赤坂田町で開いた氷解塾は、半ば生活のためもあつたが、しかし蘭学を教える中で人材育成もやつていて、錚々たる弟子たちが明治時代に活躍している。しかし神戸海軍操練所は、まさに米山檢校流で、幕臣よりも薩長土その他各藩の若者を自由に出入りさせ、土佐の饅頭屋でも町人でも身分にかかわらず海軍術を学ばせ、そのために幕府当局から睨まれ、ついに解散させられたところなどは、やはり檢校の血が入つていとみななければなるまい。その後、明治になって、静岡時代は米人クラークの静岡学校に力を添え、水川屋敷の附近にはホイットネー博士を住まわせ、博士には一橋大学の前身、商法講習所経営の応援をし、自宅では英語学校、キリスト教会の設営にも力を貸し、巖本善治の明治女学校にも応援するなど、学校教育には並々ならぬ関心を失わなかつた。しかし福沢諭吉の慶応義塾のようなことには興味がなかつたようである。」

このように、勝部真長は海舟の学校教育への関心の強さを紹介しながらも、文末では「福沢諭吉の慶応義塾のようなことには」と述べて同列には扱っていない。同文ではその理由が記されていないので、その意味するところは後述するが、海舟が応援した私立学校はこの他にもある。新島襄の同志社、井上円了の哲学館（東洋大学の前身）である。福沢諭吉、新島襄、井上円了という、日本近代高等教育史に創唱型私学の創立者としてその名を残したこの三人は、いずれも学校の危機的状况において海舟に打開のための支援を求めたのである。

本稿では、はじめに福沢諭吉、新島襄のそれぞれの海舟との関係を述べ、その上でこれまで知られることが少なかった井上円了と海舟との関係を、関係資料を紹介しながら述べてみたい。

## 二 福沢諭吉・慶応義塾の場合

安政五（一八五八）年に福沢諭吉によって創立された慶応義塾は、それから二〇年後の明治一〇年から一三年にかけて経営難に陥った。その原因は学生数の減少であった。

『慶応義塾百年史』には、明治四年から一五年までの入社生徒数と在社生徒数が明らかにされている<sup>①</sup>。それによれば、入社生徒数は四年から九年まで最大三七七名、最小一八九名であったが、一〇年には一〇五名、一一年には一三〇名と大幅に減少した。それに連動して、在社生も四年から九年まで最大三七三名、最小三一一名であったが、一〇年には二八二名、一一年には二三三名、一二年には二九三名と減少した。このような一〇年から一三年の学生数の減少は西南戦争に起因し、「西南戦争当時には、義塾の入社生が激減したばかりでなく、在学中の士族の者が動揺を来たして、多数の退学者があつたらしい。ことに在学中の鹿児島出身者約四十名は帰国した。そして西郷に従つて戦死したのも相当あつた。」<sup>②</sup>と言われている。

慶応義塾の維持費用は当初の一〇年間が主として福沢諭吉の私金によつてまかなわれていたと見られているが、その後は塾の諸規定で入学金と授業料を定めて徴収した。その授業料も物価の高騰に従つて引き上げられ、塾の収入は明治六年にそれまでの最高額一万〇四四六円に達したが、それも前述のような学生数の激減によつて、一〇年には五二二六円、一一年には四二九七円、一二年には三七二七円と、前述の最高時の三分の一にまで減り、一二年には「年所要額の半額にも満たない収入となつた」<sup>③</sup>のである。

このような経営上の危機に直面した福沢諭吉は、塾の維持資金を他から借用しようとした。しかし、その交渉は難航を極めた。この資金借用の交渉経過のはじまりの部分について、『慶応義塾百年史』と勝部真長の『勝海舟』とはまったく異なっている。

『慶応義塾百年史』では、以下のように述べられている。「当時民間において私塾に金を貸す者もないから、窮余の策としてやむを得ず政府から借用しようということになり、明治十一年の暮れ、社頭福沢の名をもって文部卿西郷従道宛に」<sup>⑤</sup>まず願書を提出した。それから福沢は、東京府知事楠本正隆、文部大輔田中不二麿、内務卿伊藤博文、工部卿井上馨、大蔵卿大隈重信、外務卿寺島宗則、海軍卿川村純義、陸軍卿山県有朋、開拓使長官黒田清隆などに対して、面談や書簡を送って運動した。このような明治政府からの維持資本（当初の計画では二五万円を無利息で一〇か年間借用、その後に変更して元金を四〇万円とし四朱利子とした）の借用の見通しが立たなかつたので、福沢は華族に対してその援助を求めた。一つは島津家で、もう一つは旧徳川家で、この交渉は明治一二年の春からはじまった。

このように記述する『慶応義塾百年史』に対して、それから二七年後に刊行された勝部真長の『勝海舟』では、福沢の交渉はまず旧徳川家、その資金の運用（貸し付け）を担当していた海舟が一番目に挙げられ、続いて政府関係者、最後に島津家となっている。勝部真長の記述の基本となっているのは、海舟がその日常を記していた「海舟日記」である。

問題は福沢が海舟と面談した日で、『慶応義塾百年史』では「明治一二年四月一〇日には大久保（二翁）を、同月一日には勝海舟を」<sup>⑥</sup>としているが、「海舟日記」では明治一一年四月一日に「福沢諭吉、学校の云々内談」、その六日後の同月一六日にも「溝口、福沢、学校の事、内談。」<sup>⑦</sup>と書かれている。両者の面談の月日



は一致しているので、それが一二年か、あるいは一二年かが問題となる。『慶応義塾百年史』は幕臣で海舟とともに幕政を担当した大久保一翁宛の福沢の書簡⑧を「一二年と判断し、そのため、さきに紹介した「当時民間において私塾に金を貸す者もないから、窮余の策としてやむを得ず政府から借用しようということになり」と、福沢の交渉過程をとらえたのであろう。しかし、『勝海舟全集』には福沢との会談日を記した「海舟日記」の他に、六月一日付けの福沢から海舟に宛てた書簡⑨があり、そのなかで福沢は「一一年五月に刊行した『通貨論』にも触れているので、慶応義塾の維持金借用の交渉はまず「明治一一年」に旧徳川家・海舟から開始されたと考えられる。海舟は六年五月に政商・大黒屋六兵衛から金子三万両を旧徳川家に献金させて、この資金をもとに私設徳川銀行を運営し、海舟自身が貸し付けの責任者となっていたからである。

明治一一年四月一〇日、大久保に会って徳川家に対して協力を求めた福沢は、財政の責任者であった海舟に相談するようにと大久保から言われ、早速その翌日（一一日）に海舟の私邸を訪れた。このときのことについて勝部真長は、海舟が旧幕臣の生活扶助を目的に徳川家の資金運用を担当していたので、福沢もかつて幕臣として翻訳方をつとめていたことから、塾の維持資金の借用を申し込み、「金額はおそらく二十五万か二十万、十年間無利子で、これを担保に国債を買い、七分の利として年一万四千元以上の利回りとなれば、これで塾財政はラクにいけるという計画であったといわれる」と述べている。

しかし、海舟へのこの申し込みは実現しなかった。それについて、『慶応義塾百年史』は、「徳川家からは、財政の余裕がないからとの理由で福沢の申し出は断ってきた」と述べている。これに対して、勝部真長は「とくに海舟が福沢に面と向かっていったのか、それとも蔭で他人にもらしたのかわからないが、『福沢もまさきに自分が丸裸にならなければ、金は貸せない』（事実『福翁自伝』にも明言しているように、福沢は三田の地所一

万三千数百坪を五百数十万で払い下げを受けて私有地としている、それをそのままにして他から借金しようというのはおかしい」といったことが世間の評判になった。①と、海舟と福沢の相談が不調におわった理由を述べている。本稿の冒頭で、勝部真長が海舟の学校教育への関心を述べたなかで、「しかし福沢諭吉の慶応義塾のようなことには興味がなかったようである。」と書いたのは、海舟と福沢のこのようなことにもとづいているのであろう。

資料からみると、福沢は海舟との初めての交渉の翌日（二二日）、大久保一翁宛の書簡②で、慶応義塾の土地や建物の坪数を記し、「昨日勝先生御宅へ参上、同様の事を御話申上置、其節口上にては尽くさざる所も可有御座と存じ、私の存意荒増し紙に記し差上置候。何れ同先生より御話も可有御座、御覽被成下候様奉願上候」とし、土地の政府払い下げ時の支払い金に触れた上で、「此地所建物を時価に売却して其金を私するは心に慊らず、且私も少々財産有之、この金に依頼せずして押々生活も出来可申覚悟に付、何卒方法を立て一種の公共物として世に遺し置度、反覆思慮の上奉願候義に御座候」と言っている。

福沢は四月一六日に海舟と二度目の会談を行ったが、六月一日に海舟へ書簡③を送り、「○参上の節御内話申上げ候一条は、不成の旨、大久保様より御文通下され、い才承了、事の成不成に拘らず清襟を煩わし、多方に御周旋成し下され候段、万々有難き仕合せ、深く感謝奉り候」と、この交渉を断念したと伝えている。

福沢の義塾の危機打開の運動は、『慶応義塾百年史』に記されているように、それから政府関係者や最後に島津家にまで展開されたが、いずれも不調に終わり、福沢は義塾の廃止を決意した。それを知った塾関係者は明治十三年に「慶応義塾維持法案」を定めて、社中がそれぞれ寄付金を拠出し、それを資本に経営危機を突破したのである。

以上のように、海舟は危機に臨んだときの福沢の姿勢を問題視したと言われているが、新島襄が同志社大学設立運動への支援を依頼したときも、一時はその取り組み姿勢を問題として断ったという経過がある。

### 三 新島襄・同志社の場合

明治七年、新島襄はアメリカ滞在中に日本におけるキリスト教大学設立の志を明らかにして、アメリカン・ボードから約五〇〇〇ドルの寄付金を集めて帰国した。翌八年に山本覚馬と結社して同志社と名づけて学校設立のために活動し、同年一月に京都で「官許同志社英学校」を開設した。

九年には新校舎の建設、一〇年には別に校舎を作り、一一年に同志社女子校を開設したが、海外のキリスト教団体の支援を受けた同志社にとって、その経営が米国人支配を受けているのか否かという問題を抱えていた。それは米国人教師雇入問題の形で問われていた。

この問題の解決で上京した明治一二年に、新島は初めて海舟と会っている。「海舟日記」には、一二年二月一日に「耶蘇教師、新島襄。」、翌一二日に「新川「島カ」襄。」と記されている。海舟がどのように対応したのか分からないが、外務大輔森有礼から、アメリカン・ボードの資金ではなく自己資金によって学校を経営するならば外国人教師の雇入は自由であるという回答を得て、新島は同月に京都へ帰っている。

その後、新島は一二年一月に、アメリカン・ボードの会長・書記長から八〇〇〇ドルの寄付を受け、一四年には新任の京都府知事・北垣国道の好意を得（北垣は元鳥取藩士で「海舟日記」に表れる）、一五年には同志社大学法科学科設置に対して奈良県の山林王から五〇〇〇〇円の寄付の約束を得るなどして、大学設立の初志の実現を目指して進んだ。

この間に、新島は海舟と二度（二二年一月二九日、一三年四月三〇日）面談している。そして、大学設立の意志を固めつつあったときに再び海舟の私邸を訪れている。巖本善治は『海舟座談』のなかで、海舟が語ったこととして、この日の会談とその後のことをつぎのように記している<sup>13</sup>。

「新島が大学を建ると言うて来た時、そう言うた。お前さんは千両の金さえ、そう扱った事のないに、十万という金を募ると言うは、とても出来ないから、およしなさいと言った。すると、西洋人がたいそう賛成すると言うから、それだからなおいけないうた。その時たいそう怒って帰ってしまったが、二、三年は少しも来なかつた。すると、顔色衰え、たいそう弱つて出て来て、前年おっしゃって下すつた事は、今になつて初めて分りました、もう実にはありがたい、私はよけいな事を初めかけてたいそう困ると言うた。それで私は言うた、お前さんも、これ程の事をして、一度失敗して気が着いたからは、今度は本當の事が出来ましょうから、そんなに弱らないで、緩りとお休みなさいと言うた。そうしましよと言つて、大磯へ行つたが、二、三ヶ月すると、とうとう死んでしまつた。」

この巖本善治の談話筆記には、時期の誤認という問題がある。この点は今後の記述で正していくが、二一年一月一九日付けの海舟宛の書簡で、新島は「五年前ニ罷出相願候同事件、即チ私立大学設立之事業ニ付、（中略）非常ニ御タ、キ被下候先生之言葉ハ、却而今日之結果ト相成<sup>14</sup>」と述べていることから、巖本善治のまとめた内容とは合致している。ただし、この会談の日が「海舟日記」にある一五年九月一日「新島讓<sup>15</sup>」（新島の資料によれば九日）か、一六年五月二四日「新島讓<sup>16</sup>」なのか、確定しがたい。

新島が大学設立のために具体的な運動を開始したのは明治一五年からで、一月に「同志社大学設立之主意之骨案」という草稿をまとめた。これには同大学の将来構想が記されていたが、一六年四月に「同志社大学校設立

「旨趣」という小冊子を印刷し、五月に上京してこれを有力者に頒布して大学設立の賛同と協力を求めた。このことから、大学設立に関する海舟への支援要請が前記の二回のうちのどの時期なのか、分らないのである。しかし、このときの海舟の新島に対する叱声のちに同志社大学設立運動に大きな転換点をもたらしたと考えられている。

新島は、前記の『海舟座談』にあつたように、はじめて大学設立のことを海舟に相談して批判を受けてから、二一年までは再訪していないが、この間も設立運動に従事した。一七年四月には京都商工会議所に府下の有志七〇余名を招待して、キリスト教主義大学の必要性を訴え、それへの賛同を求めた。しかし、伝道と大学設立運動のための旅行と過労によって健康を害した新島は、さきの演説会の直後に静養と募金を兼ねて再度の欧米旅行に出発した。留守中には準備していた「明治専門学校設立旨趣」という小冊子が印刷・頒布された。これには「創立規則」として「第一条、本校ハ左ノ三項ヲ以テ永世不易ノ原則トス。(一)智徳並進ノ主義ニ基キ諸学科ヲ専修セシムル事。(二)資本金総額ハ将来如何ナル事変ニ際会スルモ不可動事。(三)京都ヲ以テ本校設立ノ位置トスル事。第二条、本校ハ先文学部ヲ設立シ、文学、歴史、哲学、政事、経済、等ヲ講究セシム。第三条、本校ヲ明治専門学校ト称ス。第四条、本校ハ明治廿三年ヲ期シ開設スベシ。第五条、略。第六条、本校ハ先文学部設立ノ資本トシテ金七万円ヲ募集シ、漸次法、理、医学部等ニ及ボスモノトス」<sup>16</sup>と具体的に定めた。外遊中に新島はアメリカン・ボードと交渉を続けた。日本におけるキリスト教主義大学設立の緊急性を、英文の論文や書簡で関係者に訴え、アメリカン・ボードより五万ドルの寄付が同志社に対して寄せられることになった。こうして一八年一二月に帰国した新島のその後の運動が最高頂に達したのは、再び海舟と会つた二一年のことであつた。

明治二一年一月、各地で明治専門学校設立のための資金募集の演説会が開催された。二月には東京で五つの新

聞社および「国民之友」などの雑誌社の代表を招いて、設立への支援を依頼した。さらには四月にはまず京都で、府知事、府会議員、区長、戸長、会社頭取、医師、財産家などの名士六五〇余名が参加して、専門学校設立のための大演説会が開催された。ついで東京で、陸奥宗光の斡旋により井上馨邸で、陸奥、井上、青木周蔵、野村靖、渋沢栄一、原六郎、益田孝、沖守固（神奈川県知事）が出席して、学校設立のための集会が開かれた。このように高揚していく運動は、二つの形で結実した。一つは七月一九日の大隈重信外務大臣官邸での学校設立に關する相談会で、出席した大隈、井上、青木、渋沢、益田、平沼專造、岩崎弥之助、岩崎久弥、大倉喜八郎、田中平八から合わせて三万円以上の寄付予約など、中央の顯官や富豪によるものであった。もう一つは新聞・雑誌のマスコミに広告を掲載するという「十銭以上」の全国的大衆的募金であった。徳富猪一郎（蘇峰）の提案を受けて九月に、明治専門学校の名稱を同志社大学と改称して、その後新島が材料を送り徳富に起草を依頼した「同志社大学設立の旨意」は一月七日に、全国の主要な新聞、雑誌で発表され、全国的な規模での募金活動となったのである。

「同志社大学設立の旨意」に記された新島の大学とは、「彼は狭く伝道師の養成やキリスト教徒の育成を旨としたのではなく、キリスト教の真理にもとづいて生きる牧師、政治家、法律家、実業家、学者、教師、官吏、勤労者の養成を旨とし、決して特定の社会的エリートのみを養成のみを旨していたのではない。彼はこのような人間こそ正しい愛国心をもった国家に役立つ人物であり、我国の独立と近代化はそのような人々によって可能になると考えた」<sup>16</sup>とされている。

明治二二年、病身を抱えながら活動する新島に対し、五月にはアメリカから一〇万ドルの寄付の申し込みがあり、また前年の新聞・雑誌の広告によるものも含めて全国から一万四千元以上の寄付応募があった。しかし、一

○月に心臓発作に襲われた新島は、一月末には胃腸の痛みをとまって病床につくことになり、翌二三年一月二日に危篤に陥り、妻と徳富、小崎弘道を呼び同志社の将来についての遺言を残し、二日後の二三日に大学設立を追い求めながら、四七歳で死去した。

この過程で、新島が海舟の私邸を訪れたのは、『海舟座談』に記されたように、大学設立運動が一時の停滞から再開された二一年の夏以後である。「海舟日記」には、一〇月一二日に「新島襄、敵法の事、其他種々談。」とあり、長時間にわたり会談している（これらの前に七月一〇日に「徳富へ、出版の事につき、金子出来の事申し遣わす。（中略）徳富猪一郎、出版の事につき、段々事実、且、入費の事申し談ず。」とあるように、徳富もたびたび海舟の私邸を訪れている）。

一〇月一二日に、海舟と会談した新島は翌一三日に徳富に書簡を送り、すでに紹介したように「同志社大学設立の旨意」の起草を依頼するとともに、海舟との会談の模様を「大学之事も充分相願候処、大ニ喜ハレ応分之寄付もなすべく又周旋も致すへき旨御承諾」<sup>(1)</sup>されたと書いて、その喜びを伝えている。京都に帰った新島は海舟への書簡（十一月一九日付）にも、前記の新聞雑誌による「同志社大学設立の旨意」などのことを「已ニ去七日之新紙上ニ御一覽有之候通、今回ハ広ク天下之人士ニ訴へ之レカ賛成ヲ仰キ申候」といい、「五年前非常ニ御タ、キ被下候先生之御言葉ハ、却而今日之結果ト相成」<sup>(2)</sup>ったとして、五年前の海舟からの叱声が今回の運動の全国展開のきっかけになったことを伝えている。

前記の巖本善治の『海舟座談』に記された海舟の言葉は、アメリカン・ボードの支援を背景に同志社大学設立を目指した新島にとつて、後日に彼自身のこのような考え方を根本から見直す契機になったと見られている。

『同志社百年史』によれば、それは「新島の中に形成されている「自立」と「自由」と「自治」の問題に関連し

「同志社がその創立以来歴史的に背負った問題の新島なりの解釈が確立し、それを勝が諒解したことを意味する」。そして、「新島が背負ったキリスト教を根軸とする教育理念と、その運営に当たつての外人宣教師との同労とその協力・援助という国際性は、かれにとつて不可欠のことであつたのであるから、そこにおける「自立」、「自由」、「自治」は、まさにアンビバレントなかに懸命になつて成り立たせているとしなければならぬ。しかししてこのことが明治二〇年代初頭において「同志社大学設立の旨意」をしてベスト・セラータらしめ、その義捐金募集運動にきわめて広汎な応募の趨勢を醸成した秘密に関連している」<sup>18</sup>と云われている。

しかし、海舟から大学設立運動への賛意を示された新島は、さきの『海舟座談』では大磯に行つてから二、三カ月後とされていたが、実際にはそれから一年余の明治二三年一月二三日に死去した。それは海舟にとつては突然の訃報であつた。「海舟日記」に、その翌日の一月二四日「新島へ香奠持たせ遣わす。」とあり、つぎの二五日にも「新島へ香奠。」と記されている。そして、海舟は後に残された人々（徳富猪一郎・金森通倫・小崎弘道）へ、つぎのような書簡を送つている<sup>19</sup>。

「同志社諸君へ 新嶋師遠行の旨、御知らせ遣わされ驚き入り候。かねて師の思慮、度に過ぎ、事業盛大を期するに急なる、及ばず乍ら御忠告申し述べ候処、この訃音に接し、遺憾に堪えず候。今日行き掛りの大業、跡々を踏み締め候は言うべからず、むつかしきものに候間、諸君御深慮これあり、百難重なり到り候事と御覚悟專一と存じ候。小拙これ迄、艱危の衝に当り、唯々一誠字、不撓の心にて、内外我が負担するもの悉く矛盾と心得居り、漸く二十余年を経過し、猶一日の如き思いをなし申し候次第、後善の策も甚だむつかしく、案外の事も生じ候もの。右、亡師のため、且、諸君へ老朽の一言、腹藏なく申し述べ候。御聞き流し下さるべく候。以上」

この書簡には、新島の大学設立運動に対する見方、明治維新以後の海舟の信念、後事を担う同志社の人々への



思いなど、海舟自身の考えや見方がよく示されている。「海舟日記」をみると、新島の死後も同志社の関係者が相談に訪れている。海舟は、「同志社はもうこれでつぶれるから、つぶれると思って、銘々別れて、それぞれ小さなものを創めなさい。(中略)横井が先達て来て、いやどうも先生のおっしゃった通りだと言うた。」<sup>⑩</sup>と言いながら、七十五歳の高齢で病身になっても、「海舟日記」の三十年五月廿六、七日頃「横井時雄、京都同志社の善後策担当、出立。」のように、生涯にわたり見守っていた。

以上のように、同志社にとって海舟の果たしたことは歴史的な意義を持っている。

#### 四 海舟と円了の出会い

これまで福沢諭吉、新島襄のそれぞれの海舟との関係を述べてきた。海舟と出会ったときの年齢は、福沢が四三歳(海舟五五歳)、新島が三六歳(海舟五六歳)である。これから取り上げる井上円了は三一歳のときに初めて海舟に出会った。このとき、六六歳に達していた海舟は、円了というこの三五歳年下の青年をどのようにみたのか、そこから両者の関係を述べたい(福沢と海舟との年齢差は一二歳、新島とは二〇歳の差があった)。

海舟と円了との関係には、海舟の三女である逸のことがはじめにある。逸は明治一三年に目賀田種太郎と結婚した。目賀田は嘉永六(一八五三)年に江戸で生まれた。もと七〇〇石どりの幕臣である。昌平黌に学び、明治三年に一八歳で同校の後身である大学南校に入り、米留学を命ぜられ、二二歳でハーバード大学法学部法律科を卒業して帰国し、その後は文部省・司法省を経て大蔵省に転じた。一三年には現在の専修大学の前身である専修学校の創立にその一人として加わったが、主に大蔵官僚として活躍し、大蔵省少書記官、参事官、横浜税関長をつとめ、二七年に主税局長となり、日清・日露戦争の国家財政を担当し、三七年に貴族院議員、三八年に男爵

を授けられ、韓国政府の財政顧問としても活躍し、大正一二年から枢密顧問官になった。

目賀田と逸のこの結婚は「海舟日記」に、一三年三月一日「目賀田へ、於いつ〔逸〕遣わし候結納、取替せ濟む。」六月一九日「目賀田種太郎母子、於逸、婚礼、直に日光へ出立。」とある。海舟にとつて、娘の逸はもちろん、海舟の孫によれば娘婿も「じじいのお気に入り」の目賀田種太郎〔包〕と言われるような存在であった。目賀田の名は「海舟日記」に頻繁に出てくる。

東京大学を卒業して一年後の明治一九年に、二八歳になった円了はこの目賀田種太郎・逸夫妻の仲人によつて、加賀・前田家の御典医吉田淳一郎の娘・敬と結婚した。目賀田は円了より五歳年上という若い仲人であった。それから四年後明治二二年に、円了は海舟と初めて出会つてゐる。

海舟との出会いを記した資料は、円了自身、逸、稲村修道の三人によつて書かれたものが残つてゐる。

円了はこう書いてゐる〔包〕。「余先年欧米を一巡して帰り、哲学館拡張の旨趣を天下に発表するや、勝海舟翁之を聞き、人を介して余に面会を求めらる。余速に其庭に趨り以て教を乞ふ。」

逸はその出会いをこう語つてゐる〔包〕。「私の父もいろ／＼井上さんの噂をきいて、是非一度逢つてみたいと申し、或時目賀田と一緒に訪ねして『あんな若い人であつたか』と感心して帰つてまゐりました。」

稲村修道は円了没後の追悼集に、明治四年の東洋大学創立記念の式典で円了自身が語つた話を書き留めたノートから再録して、こう書いてゐる〔包〕。「自分〔円了〕が哲学館を創立しようと思ひ立つて先づ哲学館の将来に於ける主義方針といふ印刷物を当時の元老方始め朝野の名士に配付した所が、故勝伯がそれを見てスラ／＼と説流して了ふや否や、何だ老人がコンナ事を思ひ立つた所が駄目な話ぢやとブイト抛出して了はれた。幸ひ其処に自分の知人が居て、否、井上といふ男は未だ大学を出たばかりで決して老人ぢやありませんといつて呉れたさう

だ。すると伯は、ナニこれは若い者か、若いものにしてはコンナ哲学などを盛んにしたいといふ思はくが感心ぢや。ソレぢや一遍逢はうといふので又其手紙を読返された。そこで自分はお召によつて早速御前へ伺つた」

三者によつて残された円了と海舟の初めての出会い、仔細に見ると異なる部分もあるが、「海舟日記」には明治二二年九月四日に「井上円了。」とあり、この日が初めての出会いであつた。

安政五（一八五八）年に生まれた円了は、二七歳で東京大学文学部哲学科を卒業した。それから二年間は哲学、仏教改革などの著作活動に専念した。当時少なかつた文学士でもあり、またこれらの著作がベストセラーとなつたこともあつて、一躍若き知識人として脚光を浴びるようになった。そして、二〇年九月に現在の東洋大学の前身である私立哲学館を創立した。一年間で館内での教育や講義録による通信教育の体制を作り、二一年六月に欧米社会の実状視察に出発した。

青年期から洋学を学んで西洋への関心を持ち、大学では当時の最新の西洋の哲学や知識を修学した円了にとつて、この一年間にわたる海外視察は新たな見方をもたらした。「欧米各国ノ事ハ日本ニ安坐シテ想像スルトハ大ニ差異ナルモノナリ而シテ其最モ想像ノ誤謬ニ陥リ易キハ各国皆其固有ノ学問技芸ヲ愛シテ一國独立ノ精神ニ富メルヲ知ラサルコト」<sup>⑤</sup>であつたという。円了は創立時に「哲学館開設ノ旨趣」<sup>⑥</sup>において述べているように、「諸学の基礎は哲学にあり」を標榜して「余資なく優暇なき人」のために哲学専修の学校をつくり、その教育の機会を開放して日本人のそれまでの精神世界を近代的なものへと発展させようとした。しかし、欧米列強社会を視察してさきのような結論を得た円了は、「従来哲学館ハ一般ノ哲学ヲ教フル目的ナリシヲ以テ未タ別ニ主義等ヲ明言セサリシカ（中略）今回親シク欧米各国ノ学問景況ヲ目撃シ以テ現今本邦ノ体制ヲ視察シテ感悟シタル所亦尠シト為サ、ルニ由ル」<sup>⑦</sup>として、宇宙・学理（哲学）を研究する宇宙主義を裏面にもちながら表面の目的に日

本主義を掲げて、「哲学館ハ全ク日本主義ヲ以テ立チ日本ノ言語歴史宗教ヲ完全ナラシメ以テ之ヲ維持セン」<sup>⑧</sup>とし、哲学館を發展させて「日本主義ノ大学」とし一国の独立の精神を振起しようと考えた。この考えを「哲学館改良ノ目的ニ関シテノ意見」「哲学館将来ノ目的」という文章<sup>⑨</sup>にまとめて発表したのは、帰国から一か月後の明治二二年七月から八月のことであつた。

円了のこのような「日本主義ノ大学」設立に、関心を持ち賛意を示したのが海舟であつた。海舟は二四年四月に「学問の基礎」と題する小文を書いてゐる<sup>⑩</sup>。その中で、「世の治乱興亡は、その本専ら国民の正邪智愚如何によることは言を俟たざる所にして、教育の制、その宜しきを得ると否とは、実に国家の命脉に關することなれば、最も慎重すべきの事なり。夫れ大学は、我が国最も高等なる教育を施す所にして、その位置の重要なる、これに過ぐるものなし。その業を卒えて世に出づる人々は、皆この日本国の精神となりて国家を活動せしむるの重任に中るものなれば、我が国の富強を増進し、文化を開達するの效果如何は、皆、此等の人々の真正なる意志によりて、善良なる標準を与うると否とに關す。」と述べて、高等教育を受けて「以て世の先導者となり、一国の精神となる人」は、「世の幸福、邦家の隆運を進むることは人々の責任となれば、その誘導の法を過らず、充分の好成绩を得るよう、切に企望する所なり。」とし、「現今の学者の我が国に対する感情は、各自その意を異にせるは甚だ憂うべきの事どもなり。その本源を訪ぬれば、学者の我が国の歴史を重んぜざるに基する事にして」「英・仏・独・伊等西洋諸国の大学、皆甚だ自国の歴史を尊崇するは、決して我が国人の冷淡なるが如くならず。」<sup>⑪</sup>といひ、国家と学問・高等教育の關係の問い直しを主張してゐる。

このように、さきの円了の主義とこの海舟の主張は一致する。それ故に、哲学館拡張（「日本主義ノ大学」設立）を表明し初めて訪ねた円了に対して、海舟はその日に、「翁曰く哲学館の主義は大賛成なり」<sup>⑫</sup>と言つたの

である。これ以後、円了は赤坂・水川の海舟の私邸の門をくぐるようになった。「海舟日記」からその訪問日と、円了・哲学館のことを表にまとめると、つき（次頁）のようになる。

海舟は明治二五年一月二六日「久敷臥病、筆を採らず」という状態となり、「海舟日記」を翌二六年三月七日まで書いていないし、さらにこれ以後の日記は二五年までのように日々にわたらず、まばらにしか書いていないので、その後の詳細はわからないが、円了は二二年九月四日に初めて海舟に出会ってから、さきの表のように、しばしば水川邸を訪ねている。初めて会った以後のことを、逸が「それ以来井上さんの方でも『勝さん勝さん』といつていらし」<sup>③</sup>たというような親密な関係ができたのである。

## 五 円了の全国巡講と海舟

海舟は円了に初めて会ったときに、どのようなことを話したのであろうか。海舟は、「初めて来訪するものは、是非たいていは一度、一喝を蒙むるのが例であ」り、「その刹那に相手を赤裸々にして、その真相を見てしまう」<sup>④</sup>と言われていた。前述した稲村修道は、そのときのことをつぎのように記している<sup>⑤</sup>。

「自分はお召によつて早速（勝伯の）御前へ伺つた所が、例の布団の上で大安坐で、先づ自分を一瞥して『お前は未だ若いな』といふのが最初の言葉であつた。そこで自分が改めて哲学館創立に関する種々の意見を述べると、それはまあ結構な事ぢや、私も及ばずながら出来るだけの事を為ようといふので、いろいろ有益な忠告を与へて後、お前さんなどは若いから何も御承知あるまいが、一体世間の事といふものは、事さへ善ければ必ず出来ると思ふのは間違ぢや、イクラ結構な仕事でも金が無くては駄目ぢや、徳川幕府が倒れたのも実は金がなかつたからだ、国家有事の秋に瀕して幕府の金庫には金がない、さりとて外国から借入れることも出来ず揚句の果には

表 「海舟日記と円了」

海舟日記		円了・哲学館の事績
22	9・4 井上円了。	8月 (20・9に哲学館創立。海外視察後)「日本主義ノ大学」設立計画と新校舎建設着工
9	27 井上円了、哲学院〔館〕へ百円寄附。	9・11 暴風雨により落成間近の新校舎倒壊
10	3 井上円了、山県の事ニ付き内話。	10・31 新校舎落成
11	7 円了方へ一封認め遣わす。	
11	9 井上円了、十三日、哲学館開業の旨、古仏像、金子十五円寄附。	11・13 哲学館移転式(新校舎落成開館式)
23	4・11 井上円了、種々談。	7・21 円了、海舟宛に書簡を送る
5	8 ○井上円了。	9月 「哲学館ニ専門科ヲ設クル趣意」発表
9	16 井上円了。	10・10 専門科開設資金募集のための全国巡回を広告
10	16 井上円了、哲学館寄附金の事。	11・2 全国巡回に出発。12・5に帰京
12	20 井上円了。	11・31 4・1巡講
24	4・28 井上円了。	5・11 6・19巡講
7	4 井上円了。	7・17 9・6巡講
10	5 井上円了。	1・21 3・6巡講
25	1・19 井上円了。	4・5 4・9巡講
4	12 井上円了。	4・20 6・2巡講
6	23 井上円了。	7・19 9・4巡講
9	19 井上円了。	

あの始末ぢや、だからお前さんもまあそんな議論めいた事ばかり言つてゐないで何でも金を拵へさつしやい、及ばずながら私も賛成しよう……これはホンの寸志までぢやと紙包みを呉れた、あとで開いて見ると大枚百円は入つて居つた。当時自分は、何分大学を出たばかりで、一向世間の事情を知らぬから、随分ボンヤリしたものであつたが、勝伯の口からこれを聞いて大に感奮する所があり、直ちに地方遊説に出掛けて不十分ながら資金を募り、漸く学校を建てる事が出来た。今から當時を回顧して見ると全く勝伯の此親切な注意が自分の事業成功の唯一の教訓となつて居るので、爾来二十余年来、自分は此生た人の生た教訓をば、何事か為さんとする人に必ず示して居るのである……。」

稲村修道のこの文章には、初めての出会い以外のことも含まれている。前掲の「海舟日記と円了」の表から判断すると、「これはホンの寸志……」からの後段は後日のごとで、それらが一連のこととされているのである。実際はつぎのような経過であつた。

明治二二年六月に帰国した円了は、哲学館の拡張すなわち「日本主義ノ大学」の設立を決意し、その趣旨を社会に公表するとともに、それまでの麟祥院での仮校舎から本郷区駒込蓬萊町二八番地を借地して新校舎の建設に取りかかった。建築は八月一日から始められ、九月一五日に落成する予定であつた。初めて海舟と出会つたのはこうした際の九月四日であつた。

ところが、哲学館の新校舎建設は予定通りに進んでいたが、九月一日に全国各地に猛威を振るつた暴風雨によつて、その九分まで完成していた新校舎は倒壊してしまう。そのころ、仏教公認教運動のために京都にいた円了は至急の連絡を受けて帰京を急いだが、それもままならないほど、各地も深刻な被害に遭つていた。倒壊から九日後の二〇日に、円了は校舎の再建に取りかかった。この再建工事に着手してから一週間後の二七日、海舟は

円了を私邸に呼び、哲学館に百円を寄付して励ました。円了自身が書いている海舟からの教えとは、さきの稲村修道の話からすると、このときではないかと考えられる。海舟は円了に対して、こう語った<sup>85</sup>。

「翁曰く哲学館の主義は大賛成なり、宜く精神一到を以て其成功を期すべし、世の青年輩往々精神一到を試ることあるも、一年乃至三年にして成功を見ざるときは、忽ち精神を挫きて事業を中止するに至る、古人の所謂精神一到の語は、一年や二年にして成ると云ふにあらず、蓋し其成功に年月を示さざるは、無限の義を含むなり、即ち精神一到すれば、無限の歲月の間には必ず成るを云ふ、君も其心得にて哲学館の目的に従事すべしと、余謹みて其教を服膺して今日に至る、海舟翁は実に余が精神上の師なり、」

哲学館の新校舎は災害に遭遇したが、一か月半後の一〇月三十一日に竣工して、翌一月一日より新校舎での授業も開始された。落成を記念する移転式は一月一三日に挙行された。「海舟日記」によれば、海舟はその前の七日に「円了方へ一封認め遣わし、九日には私邸に呼んで、「井上円了、十三日、哲学館開業の旨、古仏像、金子十五円寄附」と、校舎新築の事業の完成を祝している。移転式の当日、「来賓控所には、勝海舟が哲学館に寄贈した仏像（文殊菩薩）が安置された。これは、勝海舟が哲学館に学術研究のための古像陳列所を設ける計画があるのに賛成して寄贈したものである。この像は現在、東洋大学図書館に保管されており、木造で高さが約四十五センチあり、台座の裏に応永二二（一四一五）年と記してある鎌倉期のもので<sup>86</sup>であった。

だが、この新校舎の建設は哲学館の経営上に大きな問題を残したものであった。哲学館のその最初の営みは円了が「固ヨリ無資本ニシテ」と言ったように、他の団体や有力者の保護や援助を受けず「全く有志ノ一時ノ寄付」で、二八〇人の賛成者、七八〇円の寄付金に基づいて出発した。そして、新校舎の建設費用は当初二〇〇〇円と見積もられ、創立直後の二〇年一〇月から「哲学館新築資金」として募集広告を出して寄付金が募られた



が、館主円了が欧米視察中であつたという事情もあり、その間の進展ははかばかしくなかつた。その時点では一五〇〇円の資金が不足していた。帰国後、「日本主義ノ大学」設立を掲げた円了は国家の独立、大学の独立、「校舎の独立」として、新校舎の建設に踏み切つたのであるが、そのときは建設費と運営費を合わせて五〇〇〇円と見積もつていた。新校舎が完成し移転が完了した時点では、「創立費および新築費として哲学館に寄せられた寄附金の合計は、三、二二三円三五銭であつた。この寄附金は、そのすべてが創立費および新築費として充用された。しかしながら、校舎の建設および諸費だけですでに四千数百円にのぼつたので、不足分は哲学館の負債として残ることになった」<sup>(2)</sup>のである。この寄附金の中には哲学館の発展に理解を示した東西本願寺からの二〇〇〇円（予約）や著名人からのものが含まれていた。翌二三年の四月一〇日、五月八日に、円了は海舟を訪ねている。そして、七月二一日付けで、「豆州熱海客舎」から海舟に宛てて、円了はつぎのような書簡を送つた<sup>(3)</sup>。

「酷暑の時下、閣下益御多祥御消光遊ばせられ、敬賀奉り候。野生儀、少々脩学上取り調べ度き事これあり、過日来、当地に滞在在り候。啓者先般御願ひ申上げ候、宮内省御下賜金の儀は、目下むづかしき趣き拝承仕り候。然るに哲学館も現今の処、維持法相立ち申さず候に付き、今秋より資金募集に着手仕り度く、その方法に付き色々愚考相運び候えども、別に良き手段これなく候。就ては毎度御配慮を煩わし恐縮の至りの御座候えども、敢て至急を要する儀にてはこれなく候間、自然御序での節、何卒先般の一条、宮内省へ御願ひ込み成し下され度く希望奉り候。既に御承知の通り兩三日前、慶応義塾へ御賜金これあり、諸新聞上に相見え申し候。その前にも感化院、工学会等へ御下賜これあり、そのほか斯文齋、皇典講究所等、先年来度々御下げ金これあり候。右諸校の例に準じて些少なりとも御下賜相成り候よう、毎度ながら御懇配成し下され度く、渴望この事に御座候。尚、委細は帰京の節、拜趨の上申上ぐべく候。先ずは暑中御見舞旁、前件御願ひ申し上げ候なり。」

この書簡のように、円了は当時、枢密顧問官であった海舟に対して、御下賜金が哲学館に下されるよう協力を依頼している。それは資金募集との関係において依頼したものであろう。この時点で円了は「哲学館も現在の処、維持法相立ち申さず候」と、その方針を持ち得ない状況であったことがわかる。円了は九月に「日本主義ノ大学」設立を進めるために、「哲学館ニ専門科ヲ設クル趣意」を発表し、従来の三年の課程に加えて、二年間の国学科・漢学科・仏（教）学科を設ける計画を明らかにしたが、依然として経営上の問題で苦悶する円了は帰京後に海舟を訪ねた。「海舟日記」に、九月一六日「井上円了」とあるのは経営上の打開策の相談であったと考えられる。円了は海舟に協力依頼した御下賜金をなぜ必要としたのか、それは分からないが、海舟との会談を経てそれまでの雑誌・新聞による寄附金の募集方法から転換する。一か月後の一〇月一六日「井上円了、哲学館寄附金の事。」とあるのは打開への道をすでに定めたときであったから、その他の会談の日の記入と異なり、海舟は「哲学館寄附金の事。」と記したのであろう。哲学館を維持・発展させるのに特定の団体や有力者に頼らず、あくまでに「独立自活の精神」を発揮してそれをかなえようとしたその打開策とは、館主円了が全国を巡回講演（以下、全国巡講）して各地の大衆から広く賛同を得るという新たな方法であった。そのとき、円了は教育、哲学、宗教などを、講演によつて全国に普及させる教化者として自らを位置づけることになった。

この会談の翌日の一七日、哲学館の機関誌「天則」が発行された。同誌には一〇月一〇日付けの「哲学館廣告」<sup>39</sup>が掲載され、「今般当館資金募集ニ付有志勧誘ノ為メ本月下旬ヨリ館主東海道筋へ出張静岡愛知岐阜三重滋賀五県下巡回相成候此段該県下有志諸君ニ通知致候也」とし、今回に続いて一月より四国・九州地方、三月より中国地方、五月より北国（北陸）地方、七月より奥羽・北海道地方へと一年間で全国を巡回する予定であることを告げている。また、同文について館主円了名で「其節ハ各地有志諸君ノ御懇配ニ預リ度予メ希望仕候又學術

教育宗教ニ関シ講義演説等御依頼ノ節ハ小生応分ノ御助力可申候」と申し添えている。円了の後半生を費やして展開された全国各地での講演（教化）と資金の募集という全国巡講は、このような事情を背景とし、海舟との相談の中で生まれたと考えられる<sup>40</sup>。

明治二十三年一月二日、哲学館の館主円了は全国各地の巡回に出発した。円了にとって、この巡回は哲学館の専門科開設の資金募集とともに、各地での講演を通じて日本人の大衆に哲学・教育・宗教の重要性を直接訴え、日本の発展への啓蒙を行うという積極的な意味を持っていた。明治中期のこのころはまだ大衆にまでその近代化が認識されていなかったからである。このような講演という啓蒙活動は、哲学館という学校への理解と協力を求めることに通じ、また海舟の最大の関心である日本社会の将来の問題にも通じるものであった。第一回の四四日間に及ぶ東海道筋の五県下での巡講を一月一日に終えた円了は、その状況を報告するために五日後の二〇日に海舟を訪ねている。そして、さきの「海舟日記と円了」の表のように、円了はそれぞれの巡講の前後に必ず海舟の私邸を訪れている。海舟に支えられながら、円了は全国へ赴いたのである。

さて、この全国巡講は哲学館の経営上でどのような成果を上げたのかと言えば、苦難の行程に反してその成績はよくなかった。二三年に四四日、二四年に一五三日と合わせて二〇〇日に及ぼんとする巡講は、一八県・一一九カ所で四四〇回の演説・講演を行ったのであるが、個別の寄付内容は、一口が一〇円はまれで、ほとんどは一円あるいは銭単位であったから、寄付金は六七六円と目標額一萬円の達成にはほど遠い結果だった。また、現地などで受け付けた応募は予約が一八九五円一四銭であったが、既納されたのはそのうちの六七六円四〇銭一厘で三三パーセントしかなかった。創立時の新聞・雑誌の広告による四〇〇人からの三千数百円に比べれば、巡講の結果とのその差は歴然としていた。今回の巡講について円了が『哲学館専門科二十四年度報告』<sup>41</sup>で「全国ノ有

志諸君二泣請スル」と序文に書かざるを得ないほど、その落胆は大きかった。

## 六 海舟の「筆奉公」

このようにして全国を巡講する館主の姿を、当時の学生はつぎのように見ていた<sup>(46)</sup>。円了「先生は時々『口を以て云へないで身を以て導く』といふ意味の事を語られた。学校の資金募集の為に旅行勝な先生が、日に焼けて稍々旅やつれのした体を教壇上に運ばれて、極めて飾気のない旅行談をなさる時、私共は旅行談以外の強い感銘を与へられずには居なかつた」という。

海舟もまた、そのような円了を叱咤激励した。二五年四月一二日、私邸に訪ねてきた円了に対して書を送った。その日のことを円了はつぎのように述べている<sup>(47)</sup>。

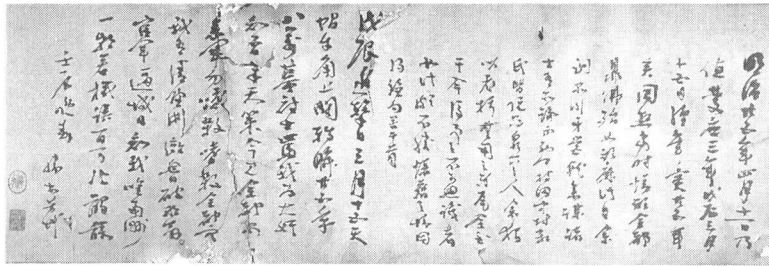
「明治廿五年四月十一日（「海舟日記」は十二日）余海舟翁を赤坂氷川に訪ふ、翁曰く今日旧曆三月十五日にして、昔年余か幕府の全権を帯ひ、品川に於て西郷南洲等と談判を開きし日なり、本年は正しく其廿五年目なれば、朝来五絶数首を作り、以て所感を述べたりとて、左の文を示され、之を其俛余に贈られたり、

明治廿五年四月十一日乃值慶応三年戊辰三月十五日、経年実廿五年矣、回想当時情形、全都鼎沸殆如乱麻、此日余到品川牙宮、就参謀諸士有所論、而西郷村田中村数氏皆既為泉下之人、余独以老朽無用之身瓦全至于今、後事之不可思議者如此、頗不勝懷旧之情、因得絶句若干首、

戊辰進撃日、三月十五天、蝸牛角上鬪、軫隣廿五年、

八万幕府士、罵我為大奸、知否奉天策、今見全都安、

参軍勿嗜殺、嗜殺全都空、我有清野術、傲魯破那翁、



井上家所蔵の勝海舟の書

官軍逼城日、知我唯南洲、一朝若機誤、百万化鬻體

〔明治廿五年四月十一日は、乃ち慶応三年戊辰三月十五日に値る。年を経るこ  
と、実に廿五年なり。当時の情形を回想すれば、全都鼎の沸いて殆んど乱麻の  
如し。此の日、余、品川の牙宮に到り、参謀諸士に就きて論ずる所有り。而ど  
も、西郷（隆盛）、村田（新八）、中村（半次郎）の数氏、皆既に泉下の人と為  
る。余独り老朽無用の身を以て、瓦全、今に至る。後事の思議するべからざる  
者、此の如し。頗る懐旧の情に勝へず、因りて絶句若干首を得たり。

戊辰進撃の日、三月一五天、蝸牛角上の闘い、転瞬廿五年。

八万幕府の士、我を罵りて大奸と為す、知るや否や奉天の策、今見る全都の  
安きを。

参軍殺すを嗜むなかれ、殺を嗜めば全都空しくならん。我に清野の術有り、  
魯（露・ロシア）に倣いて那翁（ナポレオン）を破るがごとくせん。

官軍城に逼るの日、我を知るは唯南洲（西郷）のみ、一朝若し機誤まらば、  
百万は鬻體と化せん。〕

余之を表装して書齋に掲げ、朝夕之を観る毎に翁に謁するの思をなす、

円了の巡講は当初一年間で全国を巡回する予定であったが、実際にはそれだけの  
期間では達成できなかった。一三年一月から始まって、二六年二月までかかっ  
た。延べで四年間、巡講日の合計が三九〇日に及んだ第一回の巡講で、三二県（関

東・甲信越・北陸が残った)、三六市・三区・二三〇町村で講演演説を行い、三五〇九円九〇銭の寄附金があった。これを受けて円了は巡講を終了させ、二七年からは東京にとどまって、大学設立のための学科改正などに着手した。数年先に予定した専門科を開設したいと考えたからである。

明治二九年一月、円了は「哲学館東洋大学科并東洋図書館新築費募集広告」<sup>(4)</sup>を出した。その用地として小石川区原町(現在の東洋大学白山校舎)を、二八年に三三〇〇坪、二九年に四五〇坪、合計三七五〇坪を購入した。この土地は目賀田夫妻の自宅に隣接し、土地の選定にあたっては夫妻の助言を得ていた。土地購入の費用は九九〇八円で、それまでの寄付金でまかなえた分は半分であり、五三〇五円が不足した。円了は同館の寄附金規則を改正して、新築費と維持費に分けて募集し、新築費は五〇〇〇円の予定で五年間で積み立て、維持金は五万ないし一〇万円を予定し一五年間で積み立て、維持金を資本としてその利子を経費に充当することを計画した。

七四歳になった海舟はこの計画に賛成した。海舟は能書家として知られていたもので、自ら揮毫して資金募集の先頭に立つて円了・哲学館への支援を申し出た。「伯爵勝海舟翁ハ曾テ本館設立ノ旨趣ヲ賛成シ先年即金百円ヲ寄附セラレ今回新築費募集ノ事ヲ聞キ是又大ニ賛成セラレ本年七十四歳ノ高齡ナルニモ拘ラズ老腕ヲ揮ヒ毎日若干紙ヲ認メテ之ヲ本館ニ施与シ本館ヨリ四方ノ寄附者ヘ配付スル様仰セ越サレタ」<sup>(4)</sup>のである(それまで海舟は旧幕臣で救済を求める人々に対して金がないなどのときは、代わりに書を与えることがあった)。揮毫は寄附金額、五円、一〇円、一五円、二〇円、五〇円、一〇〇円とそれぞれに応じて書幅を異ならせ、郵送方式でも受け付けられた。娘の逸は、「父が書いたものを差し上げると、それを哲学館に寄附などなすつた方々へのお礼に送っていらしたやうで、そんな風に父の書いたものが、井上さんの事業の足しになるならばと、父も一時は蔭ながら筆奉公をいたしたもので」<sup>(5)</sup>と、当時をこう語っている。

この数年間の海舟は「二十六年十月、眼くもり、筆を執る能わず」「二十七年一月十日夜、眩暈を發し、手足麻痺、中風に類す、医薬効を奏し、三月下旬に至つて軽快。」「二十八年八月以来臥病。ほとんど死期の来るごとし。我も世に在るを欲せず。十二月になつて病治り氣力回復<sup>46</sup>と、すでに健康状態は決してよくはなかつた。

二九年三月、円了は巡講を従来の全国型から一県下を巡回する方法に転換して、長野県地方に出発した。このとき、海舟の執事に宛てた三月三〇日付けの書簡にはつぎのように書かれている<sup>47</sup>。

「過日来信州各郡巡回仕り候処、各地にて御揮毫切望致す者これある為に、百余円寄附金も相集り、誠に以て有難き仕合せに御座候。先日出発の際、御揮毫二、三十枚持参仕り候えども、大抵有志に配付仕り候間、過日御願ひ申上げ置き候統地の御揮毫出来仕り居り候わば、使ひの者に御渡し下され度く願ひ上げ奉り候。外に画箋紙数葉持参致させ申し候間、御序の節、御面倒ながら御認め下され度く懇願奉り候。前述の次第、閣下へ申上げ下さるべく候なり。」

この書簡を『勝海舟全集』では明治二四年と推定しているが、円了の巡講日誌と文面から検討すると、二九年が正しい。文中の「使ひ者」とは、新潟県越路町の水島家に嫁いだ円了の妹の子で、当時井上家に寄寓していた甥で大学生の水島義郎氏である。義郎氏は毎週伯父のいいつけで海舟の私邸に伺ひ、書き貯まつた揮毫をいただいてきたという（水島敏氏の談）。

能書家の海舟の書は渴望されていたから、哲学館の広告には寄附金の「領取証ニハ伯爵勝海舟翁真筆ノ証明ヲ付記」していたほどであった。哲学館校友の田中治六はこれに関するエピソードをこう語っている<sup>48</sup>。「幸にも勝海舟先生の賛助を得て、その書を寄附者に贈呈することゝして、大に事業を促進する機となつた。されば海舟先生の学園の為に致された功績は学徒の深く銘記すべき事だ。かゝる縁故で、私も海舟先生の半折二枚を頒けて

頂くの光栄を持った。又或る時、海舟先生が『天皇陛下』といふ揮毫依頼に対して、立派なぬめに『天皇陛下』と揮はれたのを、井上先生が披き眺めて弱つてゐられたなどといふ挿話もあつた。それから先生が地方に出張の際、余り沢山の海舟先生の書を携へてをられるので、人々から偽筆だらうと疑はれて、その弁解に骨を折られたといふナンセンスな話もあつた。」

この二九年の円了の巡講は四九日間と少なかったにも拘わらず、海舟自身による哲学館への支援があつて、この年だけで一三七五円の新築寄附金が集まつたことから、その効果の大きさを知ることができる。

ところが、こうして大学への発展の道を歩みはじめたこの二九年の一月一三日夜半、蓬萊町にあつた哲学館は隣接する郁文館からの失火に遭う。この火災によつて、哲学館では講堂（教室）一棟と寄宿舎一棟を焼失した。火災から一二日後の二月二十五日付けで、円了は「哲学館類焼二付キ天下ノ志士仁人ニ訴フ」<sup>49</sup>を發表して、緊急の支援を求めた。新校舎の工事費として五〇〇〇円を翌年二月までに募集した。この広告にも海舟の揮毫の規定は再び掲げられている。

明治三二年一月一九日、海舟はこの日の午後、狭心症を發して倒れ、「死ぬかも知れないよ」といい残して、静かに眠るように死去した。二二年の哲学館の新校舎の倒壊、二九年の校舎の焼失をなど、初めての出会いから生涯にわたつて円了・哲学館を指導・支援した海舟はこうして亡くなつた<sup>50</sup>。海舟の支援もあつて、三〇年七月に新たな地（現在の白山校地）に校舎を建築した円了は、海舟の死後、再び三二年七月から第二回の全国巡講に出発した。これ以後、円了は各地の人々の求めに応じて自ら揮毫するようになったのである。

それから三年後に發生した「哲学館事件」によつてもたらされた問題などがあつて、大学から退隠し名誉学長となつた円了は、大正七年一月二〇日、この日、哲学館の三恩人の一人である海舟の池上洗足の墓前に参拝し



て、東洋大学創立三〇周年のことを報告している（他の恩人は加藤弘之、寺田福寿である）。

これまで三人の私学の創立者、福沢諭吉、新島襄、井上円了のそれぞれの勝海舟との関係を述べてきたように、海舟との出会いによって、それぞれの私学は従来の方法を転換している。海舟はその転換の契機を作った人物であるが、その関係の仕方は三様であった。それは海舟自身のそれぞれの創立者に対する見方によっている。たとえば、福沢については『海舟座談』（三〇年七月一五日）のなかで、「諭吉カエ。エー、十年程前に来たきり、来ません。大家になってしまいましたからね。相場などをして、金をもうけることがすきで、いつでも、そういうことをする男サ。」<sup>111</sup>としか見ていない（福沢は明治政府に入った海舟を、旧主家を売って新政府の顕栄の地位を買った「武士の風上にも置かれぬ者」と見ていた）。新島については同書で、「新島は少しは出来る男だと思つたから、それで、ひどく言うてやったのサ」<sup>112</sup>と言っている。円了に関する海舟の発言については、現在までに筆者が確認したものとして、『海舟座談』の中にある。明治三二年一〇月二三日の巖本善治との座談において、「（この間、戸川の事、井上円了のこと、中島のことなど、話しありたり）」<sup>113</sup>とあって、海舟が円了について語つたことはわかるのであるが、その内容は記されていない。

三人の創立者は、それぞれの私学の危機的状況を抱えて海舟と会い、その支援を求めた。結果は三様であったが、いずれも海舟との会談をきっかけに新たな展開を見せ、海舟はその転機を作った。ただ、海舟の支援の仕方は、同志社の関係者についてふれた言葉で、「事を遂げるものは、愚直でなければ。アー才ばかり走つてはイカヌ」<sup>114</sup>というのがその信条であった。知略を超えた苦難を担い全国巡講を実践した円了の姿は、この海舟の信条にもっとも即していたので高く評価され、このことを経た上で、海舟自身が円了・哲学館を直接支援することに

なったものと考えられる。

【注】

- (1) 勝部真長『勝海舟』上、PHP研究所、平成四年、一四五―一四六頁。
- (2) 『慶応義塾百年史』上、慶応義塾、昭和三年、七二―七三頁。
- (3) 同書、七二六頁。
- (4) (5) 同書、七三七頁。
- (6) 同書、七五四頁。
- (7) 『海舟日記』『勝海舟全集』二〇、勁草書房、昭和四八年。「海舟日記」は文久二年八月からはじまり、明治三一年一二月三二日まで書き続けられているが、同全集にはつぎのように収録されている。  
『勝海舟全集』一八には、「海舟日記 I」文久二年八月〜慶応三年一二月  
『勝海舟全集』一九には、「海舟日記 II」慶応四年一月〜明治七年一二月  
『勝海舟全集』二〇には、「海舟日記 III」明治八年一月〜明治一五年一二月  
『勝海舟全集』二一には、「海舟日記 IV」明治一六年一月〜明治三一年一二月  
本稿での「海舟日記」からの引用は同全集によっているが、その頁については特に注記しなかった。
- (8) 福沢諭吉書簡「二六八 大久保一翁宛」『福澤諭吉全集』一七、岩波書店、昭和三六年、三一―三二頁。同全集第二巻の「福澤諭吉年譜」でも、この書簡を明治二年としている。
- (9) 福沢諭吉書簡「九九 福沢諭吉 1 明治(十一) (カ) 年六月一日」『勝海舟全集』別巻二、勁草書房、昭和五七年、四二六―四二七頁。
- (10) 勝部真長『勝海舟』下、PHP研究所、平成四年、三一六頁。
- (11) 『慶応義塾百年史』上、前掲書、七五四頁。
- (12) 勝部真長『勝海舟』下、前掲書、三一七頁。同書ではこの評判を掲載した雑誌として、「三田町阿福の奇話」『扶桑新誌』明治二年二〜五月と、『近事評論』(第二二〇号、明治二年九月二三日)の「福沢諭吉先生勝海舟先生ノ答

弁二閉口ス」を紹介している。

勝部真長の同書によれば、その後の海舟と福沢の関係は、明治十一（十二が正しい）年五月三日に松平慶永邸で両者は出会って大論争を行い（三一―九頁）、福沢は海舟没後の三四年一月から二月にかけて『時事新報』紙上に「瘦我慢の説」を書いて、江戸城無血開城の海舟を批判した（四六一頁）が、海舟は福沢がその「瘦我慢の説」の稿本を寄こした段階（明治二十五年一月）からこれを無視し続けた（『勝海舟全集』別巻一の九六頁の福沢論吉宛書簡を参照）。

(13) 巖本善治編・勝部真長校注『新訂 海舟座談』岩波書店、昭和五八年、一九五―一九六頁。

(14) 新島襄書簡「十一月（十九日）勝安芳」『新島襄全集』3 書簡編I、同朋舎出版、昭和六二年、六七九―六八〇頁。

(15) 『同志社百年史』通史編一、学校法人同志社、昭和五四年、二三二―二三三頁。

(16) 同書、二二六頁。

(17) 新島襄書簡「十月十三日 徳富猪一郎」『新島襄全集』前掲書、六四六頁。

(18) 『同志社百年史』前掲書、二四三頁。

(19) 勝海舟書簡「同志社諸君宛」『勝海舟全集』別巻一、勁草書房、昭和五七年、一四五頁。同書ではこの書簡の日付を「明治（二十三年）年一、二月（カ）」と推定している。

(20) 『海舟座談』前掲書、一九六頁。

(21) 勝部真長『勝海舟』上、前掲書、二〇頁。

(22) 井上円了「精神一到何事不成」『円了隨筆』哲学館、明治三四年、二頁。円了自身が海舟のことについて書いたものは、これを入れて後述する三つの小文しかない。

(23) 目賀田逸子「思ひ出づるまゝを」『東洋哲学』二七―一、大正九年一月号、七一頁。

(24) 稲村修道「四角な顔の井上先生」『井上円了先生』東洋大学校友会、大正八年、一七六―一七七頁。

(25) 井上円了「哲学館目的ニツイテ」『東洋大学百年史』資料編I・上、東洋大学、昭和六三年、一〇三頁。

(26) 井上円了「哲学館開設ノ旨趣」『東洋大学百年史』前掲書、八三―八四頁。

- (27) 井上円了「哲学館目的ニツイテ」前掲書、一〇三頁。
- (28) 同書、一〇五—一〇六頁。
- (29) 井上円了「哲学館改良ノ目的ニ関シテ意見」『東洋大学百年史』前掲書、一〇〇—一〇二頁。井上円了「哲学館將來ノ目的」『東洋大学百年史』前掲書、一〇二—一〇三頁。
- (30) 勝海舟「学問の基礎」『勝海舟全集』別巻2、前掲書、七二五—七二八頁。
- (31) 井上円了「精神一到何事不成」前掲書、二頁。
- (32) 目賀田逸子「思ひ出づるまゝを」前掲書、七一頁。
- (33) 『海舟座談』前掲書、三二頁。
- (34) 稻村修道「四角な顔の井上先生」前掲書、一七七頁。なお、円了と海舟の出会いを描いたものとしては、正富汪洋作「戯曲 井上円了」(『思想と文学』三一二、昭和二二年二月号)の中の「勝海舟邸」と題するところが該当するが、これはあくまでも戯曲作品であると考えられる。
- (35) 井上円了「精神一到何事不成」前掲書、二—三頁。
- (36) 『東洋大学百年史』通史編Ⅰ、東洋大学、平成五年、一—六頁。
- (37) 同書、三—五頁。
- (38) 井上円了書簡「五井上円了 1 明治(二十三)年七月二十一日」『勝海舟全集』別巻一、前掲書、一五二—一五三頁。
- (39) 「哲学館広告」『天則』三一—四、明治二三年一〇月一七日。同広告はこの他に、『哲学館講義録』四期一年級一号(明治二三年一〇月一〇日)、『哲学館講義録』一期三年級二九号(明治二三年一〇月一八日)に掲載され、全国各地にあつて講義録で学んでいた館外生にその協力をよびかけている。
- (40) 井上円了の全国巡講の詳細については、拙稿「解説—井上円了の全国巡講」『井上円了選集』一五巻、平成一〇年、四四三—四九九頁を参照されたい。
- (41) 「哲学館専門科二十四年度報告」『東洋大学百年史』資料編Ⅰ・上、前掲書、九一八—九二二頁。
- (42) 菊池久吉「思出—井上円了先生」前掲書、二六四頁。

(43) 井上円了「勝海舟翁の筆跡」『円了隨筆』前掲書、九五―九六頁。同文には返り点が付いているがこれを省略し、読点の足りない分は補い、原文にもとづいて校訂した。読み下し文は東洋大学文学部教授の新田幸治氏に作成していただいた。なお、海舟がこの歴史的な談判を詠み一般に知られているものとしては、『勝海舟全集』一四、勁草書房、昭和四九年、二二―二頁、三九九―四〇二頁がある。

(44) 『哲学館東洋大学科井東洋図書館新築費募集広告』『東洋哲学』三一―、明治二九年三月二日号。

(45) 目賀田逸子「思ひ出づるまゝを」前掲書、七一頁。海舟の揮毫に関するエピソードとして、円了はこう書いている。「巻菱湖新潟にありて人の需に応じ、神社の幡を揮毫せしに、衆人群りて之を傍観せり、其中の一人此字は実在美なりと云ひて称讚したれば、菱湖立ちて一拳を食はせて曰く、貴様等が字の巧拙を評するは無礼千万なりと、千葉県人勝〔海〕舟翁に揮毫を乞ひ、其礼として清酒一樽を持参して拜謁を乞ふ、翁乃ち之に接見して大声叱して曰く、余が揮毫を以て酒の一升や二升に比するか、無礼の至りならずや、余は斯る謝金や贈品に対して揮毫するが如き不見識のものにあらずと、是れ又好一对の奇談なり、」(『巻菱湖と勝海舟』『円了漫録』哲学館、明治三六年、九六―九七頁)。

(46) 勝部真長「海舟年譜」『勝海舟』下、前掲書、五六七―五六八頁。

(47) 井上円了書簡「五井上円了」2明治(二十四)年三月三十日『勝海舟全集』別巻一、前掲書、一五三頁。同書ではこの書簡を「明治(二十四)年三月三十日」としているが、『井上円了選集』一二巻の「明治三十八年前開会地名一覧」(原本は井上円了『南船北馬集』三編)によれば、初めて信州(長野県)を巡講した時期は、明治二九年三月二四日から五月一〇日までであったから、この書簡の年は「明治二九年」が正しい。

(48) 田中治六「想出片々」『東洋大学と学祖井上先生』(東洋学苑特別号)、東洋大学学友会雑誌部、昭和八年三月、四頁。

(49) 井上円了「哲学館類焼ニ付天下ノ志士仁人ニ訴フ」『東洋大学百年史』資料編I・上、前掲書、九四六―九四七頁。

(50) 海舟の死後、円了は徳ぶ会に出席したと、亀谷聖馨はいう。「予が甫水氏と、交を結んでから、二十有余年になる。予が、東京朝日新聞の記者をしてゐた頃、故勝海舟翁の許にゆき、数々翁と、學術、政治等のことにつき議論をした、その頃、博士が同席せられたことがあり、爾来、交を結んだので、海舟翁が七十七歳を以て死去せられた後に

は、予と富田鉄之助翁とが、幹事で、洗足会といふものを組織し、春秋二季に、すなはち、春は桜花の盛なる頃、秋は紅葉の美麗なる頃を卜して、翁の墓前に親戚知人等が集合し、詩歌を詠み、半日を清遊し、翁の霊を慰めることにした。この会を催す毎に、東京にゐられたら、博士は、風雨の日でも、必ずそこに来て談笑せられた。」(亀谷聖馨「井上円了博士を憶ふ」『井上円了先生』前掲書、一八八—一八九頁)。

(51) 『海舟座談』前掲書、一四八頁。

(52) 同書、九九頁。

(53) 同書、八五頁。

(54) 同書、九九頁。

### 【補注】

本稿の「勝海舟と福沢諭吉の関係」を執筆するにあたっては、すでに述べたように、評者によつて相違点があつたので、できるだけ原資料から検討した。慶応義塾の関係者による研究は『慶応義塾百年史』を経て、さらに『福沢諭吉全集』に集大成されたと考えられたので、これらにもとづいて両者の関係を調べた。その中で、『勝海舟全集』にあつた明治十一年六月一日の勝安芳宛の福沢諭吉書簡が上記の本には収録されていないことを知った。この書簡の存在が『慶応義塾百年史』執筆の関係者に周知されていれば、同書の記述も誤らなかつたはずであろうと思つていたから、このことの確認を慶応義塾の関係者にお願ひしなければならぬとも考えていた。執筆時間の都合で、その依頼は印刷段階に入つてからとなつてしまつたが、慶応義塾大学の福沢研究センターの西澤直子氏にお願ひしたところ、福沢諭吉研究者の富田正文氏によつて、この問題がすでに究明されていることを教えていただいたので、そのことを本文に追記しておきたい。

勝海舟宛のさきの福沢諭吉の書簡については、富田正文「忘れられた書翰そのほか」(『福沢手帖』三号、昭和四九年七月一日)、富田正文「福沢諭吉と勝海舟」(『別冊 歴史手帖』一号、昭和四九年三月三日)、富田正文「考証 福澤諭吉」下、岩波書店、平成四年(四七六一—四七七頁)で述べられ、『慶応義塾百年史』への訂正もなされ、福沢による慶応義塾の維持金借用運動は勝海舟から始められたことが明らかにされている。そして、『考証 福澤諭吉』では福沢の海舟(旧徳川家)への借入計画の内容(三つの案)をつぎのように述べている(同書、四七四頁)。

「第一、二十万円を十年間無利息で借り入れる。その借入金で実価二十万円の公債証書を買入れ、これを抵当として貸主に差し入れる。義塾はその公債の利子を得て、維持保存の資金とする。十年たてばその元金を公債証書で返済する。これが第一策。

第二、十年間無利息二十万円の借り入れが不都合ならば、現在の塾の地所建物その他書籍器具一切を二十万円で買ってもらい、義塾は挙げてその買い主の塾とし、福澤諭吉はその二十万円をその買い主の塾に寄付し、その塾の世話人となる。これが第二策。

第三、塾は買いたくないが、地面だけなら二十万円で買ってよいというなら、塾はその二十万円を受け取って他へ移転する。このときも、その移転した塾の名義は誰であっても差し支えない。結局福澤諭吉は今の慶應義塾の地所建物を私有して子孫に遺すなどの考えは毛頭もたないのだ。これが第三。

以上三つの方策のどれか一つでも成功すれば、まずここ十年間は維持できるであろうと考えた。なぜ二十万円かといえ、そのころの華士族の禄券として政府の発行した金禄公債は七分利付であったから、二十万円で一万四千円の年収を得ることができる。西南の役後の物価騰貴にも十分に堪えて行くことができるであろうという胸算用である。」

なお、この交渉の結論については、「いま徳川家の財政に余裕がないからと断られた」と、すでに紹介したことと同様のことが述べられている。